

# 都市というコスモス

— 平安京に見る人と自然、超自然 —

斗 鬼 正 一\*

## はじめに

平安京といえば碁盤の目の都市計画で、今日の京都にもほぼそのまま残されているが、実は、碁盤の目はおろか、直線、直角、長方形といったものさえ自然界には存在しない。丸山隆司は、平安京のこうした全く人工的な碁盤の目の都市空間と、5×10の方形に日本語のすべての発音をはめ込んだ五十音図には、共通の側面があるという。すなわち、日本語といっても、元々計画的に作られたものではなく、いわば「自然に」形成されてきたものであるから、120以上という多様な音韻が用いられていた。つまり決して統制された整然たるものではなかったのだが、五十音図の登場で、濁音、半濁音、撥音などがノイズとして方形の枠組みから排除された。その結果、整然とした音韻体系を持った、いわば一つの音のコスモスとしての統制された言語、日本語が作り出された（丸山、2004）。

平安京もまた、多彩な動物、植物、そして人が棲息する多様な地形の自然の空間の中に、自然界にはない直線、方形の空間が切り取られ、自然を排除し、天皇を中心に人を配置して作られた都市であり、さらには、日本という漠として広がる空間を、権力の意志、価値観が投影、結実した国家という空間、すなわち一つのコスモスとして作り上げ統制する中心として作られたものである（桜井、2000）。

人は自ら作り上げた秩序が存在しない空間、つまり地形、気候、水、動物、植物といった自然がそのままの空間、すなわち混沌のカオスの中で生活していくことはできない。それゆえ人は自然を排除し、人を配置して都市を作る。

現代日本においては、絶対権力者が意のままにすべてを計画した都市を作るということは不可能であるが、平安京は、桓武天皇が自らの意志で計画し作り上げた。したがって完璧に統制され、カオスが排除された、まさに「平安楽土」のコスモスとして作り上げられたものである。さらに平安京は、その後も無数の天変地異、戦乱に襲われ続けたにもかかわらず、それ以前の宮都とは異なり、明治維新まで都であり続け、今なお人口150万人の大都市として生き続けている。

都市とは人が生きていくために自らの意志で作り上げた最大の文化であるとするなら、まさに平安京はそれを究極の形で実現したものである。それゆえ本稿は、そうした究極の都市平安京を事例に、人にとって、都市を作るとは、自然とは、そして人が生きていくとは何なのかを考えることを目的とする。

## 第1章 自然の排除、統制による コスモス

### I. 都の空間の切り取り

#### 1. 自然の空間、地形

京都盆地は三方を山に囲まれた「山河襟帯」自然に城をなす地といわれる。こうした地形は数百万年かかって形作られたもので、最後の氷河期が

2009年11月30日受付

\* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 都市人類学

終わる約1万年前には、現在の姿になった。すなわち京都盆地は洪積世（更新世）頃まで大部分が湖盆で、周辺の山麓地帯は洪積層が堆積、西山山地の山麓には乙訓、長岡の洪積丘陵が台地状に横たわっている。盆地床は、河川の堆積による沖積地で、北部は北白川、鷹峯の扇状地が広がっている。

それゆえ、平安京は北が高く、南に向かって緩やかに傾斜しており、北部の上賀茂付近は標高約100メートル、南部の宇治川右岸の淀付近は標高約10メートルである。

こうした空間に、自然発生的にはなく、桓武天皇の意思により造営されたのが平安京である。

## 2. 洛中洛外という都の内・外の境界線

平安京は唐の都に擬えて「洛陽」と称し、天皇の居所である宮中、市中を洛中、外を辺土、<sup>へんど</sup> 応仁の乱頃から後には洛外と呼ぶようになった。

平安時代には洛中は<sup>きょうしき</sup>京職、検非違使、辺土（洛外）は山城国府の管轄だったのだが、この洛中洛外の境界を鴨長明は『方丈記』の中で、「一条よりは南、九条よりは北、京極よりは西、朱雀よりは東」が洛中、白河、西の京（右京）を辺土としている。辺土の中でも鴨川の東、白河、六波羅などは河東と呼ばれた。

1288（正応元）年の殺生禁止宣旨では、適用外の洛中の外側を「近境」とし、東は東山の下、南は赤江（伏見区）、西は桂川の東、北は賀茂の山としている。鎌倉時代末期の朝廷や室町幕府が酒屋役を課した地域は「洛中辺土」とされている。

農村部を除いた洛中地域を特に<sup>きょうちゅう</sup>京中として上京、下京のそれぞれの町年寄（後に町代）による一定の自治を認め、「惣組」（上京、下京）—「町組」—各町という近世京都の地縁共同体が形成された。

## 3. 御土居

洛中洛外の境界はいくたびも変更されたが、もっとも大がかりで計画的な変更は、豊臣秀吉による都市計画である。秀吉は、聚楽第や寺町の建設などと共に、1591（天正19）年御土居と呼ばれる土手を建設した。都は応仁の乱によって荒廃し、

上京、下京の2つの町に分かれ、それぞれに惣<sup>そう</sup>構<sup>がまえ</sup>と呼ばれる防壁があったが、これを取り壊し、さらに大がかりな御土居を建設した。北端は北区紫竹、南端は南区の東寺の南、東端は現在の河原町通、西端は中京区の円町駅付近で、延長約23 km、土塁の高さ3 m、基底部の幅9 m、堀は幅約4~18 m、囲む範囲は南北約8.5 km、東西約3.5 kmの縦長である。

建設の目的は、軍事的防衛目的、市域の拡張、そして東が鴨川西岸に、西は紙屋川に沿っていることからわかるように、堤防としての役割も期待されたが、洛中と洛外を明確に区別する境界線としての意味があり、洛中と洛外を結ぶ道が横切る場所には、鞍馬口、大原口、荒神口、栗田口、伏見口、東寺口、丹波口、長坂口など10か所ほどの「口」が設けられ、街道が延びていた。

豊臣政権崩壊後は、道路を分断していた部分を取り壊され多くの出入口が設けられた。たとえば四条通を塞ぐ四条河原町の部分は1601（慶長6）年に撤去されている。また木屋町、<sup>ぼんとちょう</sup>先斗町など御土居の東側の鴨川河原まで町が広がり、1670（寛文10）年には寛文新堤が完成したため、堤防としての意味もなくなり、寺社や公家に払い下げられ、取り壊されて住宅地などになった。これ以外は多くが残り、幕府によって竹が植えられていたが、明治以降市街地の拡張につれて破壊され、現在は残された9か所が国指定史跡となっている。

こうした変動を経て都市部は拡大、洛外にまで広がった上京と下京が、現在827.98 km<sup>2</sup>の京都市となっているが、いずれにしろ平安京は、京都盆地という空間に、境界を明確にした形で、切り取られてきたのである。

## II. 都の内の空間の統制

### 1. 碁盤の目の地割

平安京は、延喜式によると東西1,508丈（約4.5 km）、南北1,753丈（約5.2 km）の長方形に切り取られ、四周は、幅10丈の北極大路、東極大路、西極大路と、都の正面で高さ2 mほどの羅城を含む幅12丈の南極大路に囲まれていた。

都の正門は幅約35 m、奥行き約9 m、高さ約21

m, 正面7間, 重層の巨大な羅城門で, これを抜けると, 内裏の朱雀門まで幅28丈(約84m)のメインストリート朱雀大路が通じる。朱雀大路は両側に坊城(築垣)のある柳の並木道で, 近くに外国使節を迎える二つの鴻臚館<sup>こうろかん</sup>, 東西の市, 東寺と西寺など, 重要な施設が並べられていた。

## 2. 定位

こうして切り取られた平安京は, まず左京, 右京に分けられ, 東西に通る大路によって条, 東西南北の大路で区画された坊, そして保, さらに最小の街区である町へと分割された。四十丈四方の町をユニットとし, 四町で一保, 四保で一坊, 四坊で一条である。大路小路から成る道路と街区とを, 階層的秩序のもとに整然と組み立てた「条坊制」で, 都の中の空間は, 「左京三条四坊五保六町」といった形であらゆる地点を特定できるとなり, 地番としても, 行政の末端組織としても機能した。

京都では現在もすべての道に名前が付けられ, 東西, 南北の道の名で交差点を示し, そこから上<sup>あが</sup>ル(北上), 下<sup>さが</sup>ル(南下), 東入ル, 西入ルという移動方向を示す形で, 地点が示される。たとえば京都府庁は通例上京区下立売通新町西入ルと表現されるが, これは南北方向に走る下立売通を進み, 新町通との交差点で西に入った所ということになる。

通りの名を読み込んだ歌「丸竹夷<sup>まるたけえびす</sup>」, 「寺御幸<sup>てらごこ</sup>」があるし, 平安京の「路」(東西方向)は約120m間隔なので, 例えば二条から三条までは間に3本の道があるから,  $120 \times 4 = \text{約} 480 \text{ m}$ , 南北方向の道は約60m間隔なので, 例えば東洞院から衣棚までは間に4本の道があり,  $60 \times 5 = \text{約} 300 \text{ m}$ などとわかる。

このように都内の空間は, あらゆる地点の位置, 方向, 距離が特定でき, 容易に移動できる, 統制し尽くされた空間となっているのである。

## Ⅲ. 水の排除によるコスモス

### 1. 自然の水

京都盆地には, 丹波高地の水を集めた大堰川が,

亀岡盆地から保津峡を経て流れ込み, 桂川となる。

鴨川は, 河川法上は雲ヶ畑川に中津川が合流する出合橋から下流だが, 雲ヶ畑川のさらに上流は, 祖父谷川, 雲ヶ畑岩屋川であり, 北区の棧敷ヶ岳が源流とされている。また, 貴船神社社伝では, 神武天皇の母である玉依姫命が, 淀川, 鴨川の源流を遡上した際にたどりついたのが貴船の地とされるため, 貴船川を鴨川の源流と見なすこともある。鞍馬川と合流後南南東に流れ, 加茂大橋手前で高野川と合流。市内を南に流れ, 下鳥羽で桂川に注ぎ, 桂川は淀付近で, 琵琶湖が源流の宇治川に注ぎ, 淀川となり, 大阪湾に流れる。

### 2. 水の排除, 統制

京都盆地では, 縄文時代にはすでに河川の氾濫が激しい盆地中央部も開発されており, また渡来人の秦氏が桂川に大堰を設け, 不毛の大地を耕地に開拓したりしていたが, 平安京の立地選定には, とりわけ淀川が, 平城京にはない交通手段として重要と評価された。

それゆえ平安京にとって, 河川の有存在は有利であるとともに大きな脅威でもあり, 造営時の水路整備では, 鴨川右岸沿いに京極川を掘って都の東限とし, 堀川を御池から南に直進させる, という大工事が行われた。また1895(明治28)年の京都市参事会, 1932(昭和7)年の塚本常雄の研究のように, 鴨川の流路自体が, 遷都の際に変更されたとする人工河川説も広く知られている。

その後も「賀茂の水」は, 平安末期に権勢をふるった白河法皇が, 自らの意に沿わないもの「天下三大不如意」の筆頭に挙げているように, 氾濫を繰り返す暴れ川として恐れられてきた。元々の急勾配, 造営時の北山の木の伐採, 市街の東への拡大による河原の市街地化などが原因とされるが, 824(天長元)年には治水担当の官職防鴨河使が置かれ, 御土居東部も鴨川堤防として計画された。1670(寛文10)年には今出川通から五条通まで寛文新堤が設けられ, 御土居との間が新たな市街地として開発されたりしている。神仏頼みも行われ, 仲源寺目疾地蔵<sup>めやみ</sup>は, 鴨川の洪水予防の雨止地蔵が転じたものといわれる。

それでも洪水は続き、昭和に入っても1934（昭和9）年の室戸台風や、死傷者83名、三条大橋、五条大橋流失など大きな被害を出した1935（昭和10）年の大洪水が知られている。

ようやく洪水被害がなくなったのは、河道掘り下げ、多数の堰の建設などが行われた1947（昭和22）年完成の河川改修事業の後である。

### 3. 手懐けられた水

みそそぎ川は、鴨川から分流され、デートや納涼床を楽しめる静かな流れだが、そこからさらに角倉了以が物流の幹線として堤内に引き込んだのが高瀬川である。

みそそぎ川を経て、さらに水門から取り入れられるため、洪水の心配もなく、静かな流れが大都市に風情を作り出す。分流地点では角倉邸庭園を流れ、現在は日本料理店の店内で、庭の一部として鑑賞されている。

平安京では、川、水は自然の持つ牙を抜かれ、馴致され、手懐けられて、利用されつつ、穏やかに流されているのである。

## IV. 動植物の排除と統制

### 1. 開 発

京都盆地に人が住み始めたのは3~1万年前の先土器時代で、それから縄文人、弥生人の時代が続き、農耕の生産力を背景にした強力な政治勢力ができていた。遷都以前から勢力を持つ氏族は、出雲氏、小野氏、八坂氏、宇治氏、土師氏、秦氏、鴨氏などだが、このうち秦氏は渡来人で、平安遷都以前の創建である上賀茂神社、下鴨神社も、水をつかさどる豪族鴨氏とかかわりが深いし、7世紀創建の広隆寺も、土木技術に秀でた秦氏が住んでいた地域にある。平安遷都以前にも京都盆地には、人々の住む集落があり、神社、仏閣も建てられていた。

### 2. 動植物の排除、統制

しかしながら、都とするには未開発の部分も多かったから、都市計画は、水の統制と共に、森を切り開き、獣や植物を排除し、動物としての人の

生存を可能にする空間を作り出すところから始められた。

こうした排除は稲にもおよび、都の中では水田耕作が禁止されていたほどである。

ただ他方で、当然米、野菜といった植物が食用として、植木、草花、魚などが庭に植えたり、池に放したりして楽しむためのものとして、導入されたわけで、都の空間は、自然を排除、統制した空間として確保された、というわけである。

## V. 人の統制によるコスモス

### 1. 異民族の排除

自らが世界の中央でもっとも進んでおり、周辺は後れているという中華思想の影響を受け、日本でも天皇の支配する中央に対して、周縁、遠隔地に住む人々、蝦夷、隼人などは、天皇がやがて支配し、帰属させ、教化していくものという考え方が取られた。

東辺、北辺、すなわち東海、東山、北陸道の蝦夷と接する地域、西辺すなわち西海道の隼人に接する地域は「辺境」とされ、蝦夷、隼人に対しては、懐柔策とともに、軍を常駐させ、城柵をおいた。隼人は8世紀前半には服属したが、東北の蝦夷は服属せず、8世紀後半に柵を設置、新たな郡を設立して、税を徴収しようとした。これに対して蝦夷は774（宝亀5）年桃生城（宮城県桃生郡）を、780（宝亀11）年には、国府多賀城（宮城県多賀城市）を攻撃。戦乱は30年も続いた。

そうした中、平安遷都を行った桓武天皇は、遷都に先立ち、伊勢神宮と賀茂社に、遷都と征夷の成功を祈念している。すなわち、権力の中枢たる都の建設と、朝廷にまつろわぬ蝦夷の住む東北地方の統制を進め、支配領域を拡大、統制することが、桓武の二大事業だったわけである。そこで桓武は、坂上田村麻呂を征夷大將軍に起用、坂上は802（延暦21）年蝦夷の指導者阿弭流為<sup>アヒルイ</sup>を降伏させ、征討に成功した。

桓武は、平安京をもっとも異民族から隔てられた、列島にあまねく広がる朝廷の秩序、コスモスの中心として確保したのである。

## 2. 都の人々の統制

こうして切り取られた平安京の空間に住む人は10万～15万人と想像されており、長岡京、平城京などから移住してきた天皇、皇族、貴族、役人、上京して1年間、諸官衝の雑役に従事する衛仕、仕丁、合人などの雑色人、そして平安京以前から生活していたり、地方から流入してきた商人、職人、農民といった庶民もいた。

天皇は、地形的にも一番高い北に、南面して内裏を構え、貴族がその周囲に邸を設けた。南、すなわち傾斜を下るにつれて、役人の邸宅、衛仕、仕丁たちが生活する「厨町」の居住施設や農家など、身分が低い人々の住むところとされ、難波京の宅地班給の規定に準じて、三位以上のものが一町、四位と上位が半町、六位以下が四分の一町以下と規定され、配置されていた。

農民の場合、「京戸」は、左右京職が籍帳に登録した人々で、最小規模である南北五丈東西十丈の宅地（約450m<sup>2</sup>）が当てられ、都の中では水田耕作が禁止されていたから、京外の土地に口分田が班給されていた。

都の空間は、一方で排除、他方で身分による配置、という形で、人々を統制した空間として確保されていたのである。

## 3. 犯罪の排除

江戸以前は、現在のような刑務所での懲役刑とは異なり、死刑が多かったが、平安京の場合、石川五右衛門釜炒りの刑で知られるように、鴨川の河原が、中世以来処刑の場だった。また西の京町には西土手刑場、東海道の粟田口に粟田口刑場があり、大内裏の東、現京都府庁あたりの左獄、六角通りの六角獄舎から、執行の当日、一条戻り橋を渡って、松原通の十念ヶ辻で分かれて粟田口か西土手に向かい、磔や斬首刑に処せられた。粟田口刑場では処刑者総数が15,000人にも上り、1,000人に一基の供養塔が15立てられていたほどで、東海道沿いで人通りも多かったため、オランダ商館のケンペルをはじめ多くの人々が記録に残している（ケンペル、2005）。

動物である人は本能に基づいて行動するが、そ

のままでは文化の秩序をはみ出し、社会をカオスにしてしまう。したがって犯罪は反社会的行為とされ、都の空間では、河原、街道入り口という境界的空間に排除していたのである。

## 4. 死の排除

平安京でも当初は、京内の空闲地が風葬地とされており、平安時代には葬送の互助関係が成立していなかったようで、行き倒れなどは放置され、貧しい、身寄りがいない人々も放置されたり、藪などに捨てたりしていた。葬送する人のいない死体は、検非違使の配下が河原などに運んでいた。右獄の死者は紙屋川の河原に遺棄したし、死の穢れを恐れ、使用人が死にそうになると死ぬ前に家の外に出したという。

しかしやがて、京中に死人あるべからずとされ、皇都および道路側溝に埋葬してはならないという喪葬令が出され、12世紀半ばには蓮台野に共同墓地が作られ、庶民もそこに運ばれ、葬られるようになった。右京の数か所で墓が発掘されているものの、数が少なく、おおむね守られていたとされ、13世紀前半には平安京内では死体放置が劇的に減少した。

死は自らの存在自体を消してしまう最も恐るべき自然の現象であるから、死の蹂躪する空間は、人にとっては最悪のカオスである。したがって、都でも、死を、死者を、死体を、都の空間から外に排除し、内を生者の空間として確保する仕組みが作られていたのである。

## VI. 交通の統制

### 1. 羅城門

羅城門は、平安京遷都後早々の796（延暦15）年に作られた平安京の正門で、都への悪鬼の侵入を防ぐために、二階楼上には兜跋毘沙門天像が置かれた。柱は朱塗りで本瓦葺の堂々たる建築物だったが、980（天元3）年に暴風雨で倒壊、以後再建されていないため、実際に存在したのは180年程である。毘沙門天像は現在、東寺に安置されている。

また羅城門から鳥羽の港に至る鳥羽の作り道が

建設され、物資や外国からの賓客はこの道を通して都に入った。

## 2. 七口

『続日本紀』には「左右ノ職ニ仰テ街巷ヲ警固シ亦、山城国五道ヲ固メシム」とあり、京の五つの出入口は、大津、宇治橋、大原道、大枝道、山崎ノ橋としている。

また『源平盛衰記』によれば、「西光法師、七道ノ辻毎に六体の地藏菩薩を造り奉り七か所に安置す」といい、その場所は四宮河原、木幡里、造道、西ノ七条、蓮台野、美曾呂池、西坂本であったとしているが、現在も四宮地藏が現存している。この七つの出入口がいわゆる「京の七口」である。

『異本太平記』では「四宮河原は江州大津に通じ粟田口もこれに合す、木幡里は大和路ともいい、造道は鳥羽を経て山崎に通ず。また九条より向日明神の前をすぎてこの道に合す。西ノ七条は大枝越ともいい、南丹波に通ず。蓮台野は長坂越、美曾呂池は鞍馬口これなり。西坂本は大原口とも竜華越ともいい北近江に通ず」としている。

## 3. 水路と市

外部空間から人や物が流入する接点になる市は、遷都に先立って、794（延暦13）年7月に、朱雀大路の東西にあり鳥羽に続く堀川にそって東市、西市が建設された。当初四町で、10世紀には東西南北へ十字状に広がり、市町八町となった。東西市は官設市場であり、市人が店を運営し、市司が市人を管轄、毎月15日以前は東市、15日以後は西市が開かれた。午後に市門を開いて売買を行い、日没前には市門が閉じられた。

都の空間への動物、植物、そして人の出入りは、あくまで統制した形で行われていたのである。

## VII. 音と時の統制

### 1. 音の統制

五行思想は中国で醸成された、森羅万象の生成変化を説明する宇宙論で、木火土金水の五気によって万物が生成し、万象の変化はその勢力の交代循環によって起こると考える。音に関しても、方位、

季節、色彩、母音、内臓、世界の元素などとの連関のなかでとらえる宇宙論的な考え方で、たとえば北方は盤渉調<sup>ばんしきちやう</sup>、四季の冬、元素の水、獣神の玄武、母音の「え」、内臓の腎、知覚の耳、色彩の黒を指し示す方位ということになる。

ところで京都の梵鐘の音色調査を行った中川真によると、西方の神護寺は平調<sup>ひやうじやう</sup>、北方の大徳寺（北区）で盤渉調、東方の高台寺（東山区）、清水寺で上無調<sup>かみむちやう</sup>、知恩院（東山区）で下無調<sup>しもむ</sup>、南方の西本願寺で杓越調<sup>いちごちやう</sup>甲と、五行の法則と合致している例が多いという。

平安京では多くの梵鐘が六時の作法、つまり晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の刻を知らせていた。そして、その響きが、五行思想によるものだったわけで、都は、自然のままの音が溢れる都市ではなく、宇宙との一体化が図られた曼荼羅都市としてのコスモスでもあった（中川、2004）。

### 2. 時の統制

平安京では7世紀半ばから8世紀初め頃には1日を12に分けて2時間ごとに鼓が告げていた。「時の鼓」は陰陽寮の「時司」が管理し、延喜式（927年）には、太鼓を打つ回数についての施行細目が記されている。平安京の諸門の開閉、朝政の執務時間、市の時も太鼓が知らせていたが、今日のような騒音のなかった時代には、南端の羅城門は4km隔たっていたものの、今日のような騒音のなかった時代には、聞こえたとされる。

こうして太鼓の音で時が告げられることは、都の空間を音により画定するだけでなく、過去から未来へと永遠に流れ続けている自然の「時」の流れが、管理、統制された「時間」とされ、人々の生活がすべてそれによって、統制されていた、というわけである。

### 自然排除と統制によるコスモス

平安京は、自然の空間に、まずは直線による境界を明確にした形で切り取られ、行政的にも外部と切り離し、あらゆる地点が定位可能という統制された空間として確保される。

さらに人は猛獣が跋扈し、植物が地表を覆い尽

くし、水が溢れ、といった空間に生きていくことはできないから、動植物や水といった自然を排除、馴化する。

そして人々も身分によって配置され、人、物の移動から時、音まで統制される。

要するに都の空間は、外部の自然の支配する空間から切り取られ、権力の価値観を投影して計画、統制された空間、すなわちコスモスとして確保されていた、というわけである。

## 第2章 侵入、発生するカオス

### I. 災 害

#### 1. 天変地異

こうしてコスモスとして確保された都の空間ではあるが、日照り、飢饉、風水害、雷、そして地震といった自然災害、天変地異が繰り返し起こり、人々の生活を攪乱した。

#### 2. 疫 病

とりわけ恐れられたのは伝染病で、医学的知識のない時代、人々の間に悪疫が流行し、つぎつぎと倒れ、都大路に屍が重なった。

自然はこうして常に、都の都市空間をコスモス足りえない、カオスへと引き戻すべく侵入してくるのである。

### II. 鬼

#### 1. 羅城門の鬼

天変地異、疫病などの災厄をもたらす、コスモスを脅かすのは、都の空間に侵入する鬼、妖怪といった超自然的存在と考えられた。

鬼は今日では、裸の肌は赤、黒、青といった色で、角と牙をはやし、虎皮のパンツをはき、鉄の棒を持ち、人を食うと定型化されている。しかし元来は死者の魂の意で、時代により皇威に従わぬ民族、人に祟る幽鬼、物の怪、悪霊、疫病神など、多様であるが、いずれにしろ盛んに出没し、恐れられた。

中でもよく知られたのが都の南端の羅城門である。羅城門には鬼が棲み、夜な夜な現れては人を

食うという噂が立ち、源頼光の命で噂の真偽を確かめに赴いた家来の渡辺綱は鬼と出会う。綱は頼光から賜った太刀で鬼の腕を切り落としたが、鬼は空に消えてしまう。腕を奪われた鬼は、老母に化けて頼光のところに奪い返しに来るが、鬼切の剣で殺される。この『太平記』巻23話を始め、能『羅生門』、歌舞伎舞踊『茨木』、長唄『綱館』などにも同様の話が扱われている。

『今昔物語集』巻29第18話「羅城門登上層見死人盗人語」には、隠れ場所に困って羅城門の楼に登り、白髪の老婆が若い女の死体から髪の毛を一本ずつ抜きとっているのを見た盗人が、死体と老婆の着物を剥ぎ取り、髪の毛を奪って逃げる、といった都の南端九条通の羅城門の不気味な様子が描かれている。

芥川龍之介はこれを原典として1915（大正4）年に短編小説『羅生門』を発表した。主人に暇を出された主人公が、明日の寝食にも窮して盗人になることを思いながらためらっていたところ、羅生門で猿のような老婆と出会い、生きるためには悪が許されることを教えられ、老婆の着物を奪い取って闇のなかに姿を消す、という物語である。

#### 2. 一条戻橋の鬼

一条戻橋は、都の北端一条通が、都への物の流通経路として作られた東堀川と交わる地点にある。918（延喜18）年、文章博士三善清行が死亡した時、遠方にいた息子浄蔵が訃報を受けて都に帰ると、ちょうど葬列が橋の上を通っていた。浄蔵は大いに泣き悲しみ、祈ったところ、不思議にも父は一時生き返り、父子は言葉を交わしたという伝説が残るように、都と他界、都の外側のカオスの世界との境界にあたる橋である。

この橋は鬼の出没する場所として知られ、渡辺綱が夜中に一条戻橋のたもとを通りかかると、美しい女がおり、夜も更けて恐ろしいので家まで送ってほしいと頼まれた。綱は夜中に女が一人では怪しいと思いながらも、馬に乗せた。すると女はたちまち鬼に姿を変え、綱の髪をつかんで愛宕山の方向へ飛んで行った。綱は鬼の腕を太刀で切り落として逃げる事ができた。腕は摂津国渡

辺の渡辺綱の屋敷に置かれていたが、綱の義母に化けた鬼が取り戻したという。

### 3. 大江山の酒呑童子

平安時代初期、京の都へ出て金銀財宝を奪い、婦女子をかどわかすなど、悪行の数々を行ない、人々に不安を与える大江山の酒呑童子がいた。御伽草子、絵巻、謡曲、古浄瑠璃、歌舞伎では酒呑童子は鬼として描かれ、池田中納言の娘をさらい、奏聞を受けた帝に退治を命ぜられた源頼光が、渡辺綱、坂田金時ら四天王と、藤原保昌らを従えて、山伏姿で大江山に登り、千丈ヶ嶽で童子を退治、姫を救ったとされる。

## Ⅲ. 妖怪、魍魎魍魎

### 1. 百鬼夜行

都の北の境界線一条通、とりわけ一条戻橋には、多くの異形の妖怪たちが夜中に徒党を組んで行進する百鬼夜行という怪異が起こったという。貴族たちは夜行に出会わないように陰陽師に相談し、怪異が起こりやすい夜行日の夜には外出を避けたり、魔除けの護符を持ち歩いたほどだった。

大徳寺真珠庵『百鬼夜行絵巻』などによると、異形の妖怪たちの多くが、扇、釜、琵琶、琴、鉢、草履、鍋といった古道具が変化した妖怪付喪神で、これは製造技術が発展し、新しい道具が大量に生産され、それまでの道具が不要になった、大量消費的な時代に登場したのだという。

### 2. 土蜘蛛

北野天満宮そばの観音寺境内には蜘蛛塚がある。これは石灯籠の残欠で、元々清和院前にあり、源頼光を悩ませた土蜘蛛が棲息していたといわれる。

上品蓮台寺（北区）には、源頼光朝臣塚（蜘蛛塚）がある。塔頭宝泉寺の後方にあったものを1932（昭和7）年頃に移したものだが、源頼光の墓とも土蜘蛛が潜伏していた塚とも言われる。

この土蜘蛛は『平家物語』の「剣の巻」にも登場する。奇病に悩む源頼光のもとに胡蝶という女が朝廷の医療所から薬を届けにやってくるが、入れ替わるように怪しい僧が現れ、蜘蛛の巣を投げ

て襲いかかる。頼光はこれを切って撃退し、駆けつけた独武者に剣の威徳を語り、蜘蛛切りと名づける。血の跡を追って独武者の軍勢が葛城山に行くと、土蜘蛛の妖怪が現れ、巣を繰り出して防戦するが、ついに首を落とされる。

平家物語を原典に能の曲目ともなっているが、絵巻でも『土蜘蛛草紙』一卷が知られている。源頼光と渡辺綱が神楽岡の廃屋で妖怪変化に会い、斬りつけた血の痕をたどると、西山奥の洞窟で巨大な土蜘蛛を発見、仕留める、という武勇談である。

この土蜘蛛は、『日本書紀』『神武紀』には、「身短くして手足長し、侏儒と相にたり」と書かれている。「景行紀」では朝廷の命に従わず、石窟に住む人が土蜘蛛とされている。

いまでこそ世界で数少ない、単一民族に近い国とされる日本だが、かつては各地に人種的にも、文化的にも、かなりの差異を持った人々が住んでいた。それを統一したのが、朝廷だったわけだが、その過程では、多くの戦いがあったし、いったん統一がなった後も、まつろわぬ者達は絶えなかった。そうした記憶をとどめるのが、鬼退治、土蜘蛛退治の伝説であり、統一的な秩序に抵抗した人々が鬼、土蜘蛛、といったレッテルを貼られ、差別、抑圧された。

### 3. 鶴

上京区の二条児童公園には、鶴大明神という小さな祠がある。創祀は不明で、式内・宮中神である大宮賣神の論考社とされ、昭和の二条公園造営の時、小祠が建てられた。

『平家物語』によると、仁平の時、毎晩丑の刻に、東三条の森から黒雲が現れ内裏を覆い、近衛天皇が異様に怯えて苦悶した。名僧が祈祷を修めたが験はないため、源頼政が選ばれて警護についた。頼政は黒雲に目を凝らし、妖しいものを「南無八幡大菩薩」と念じながら矢で射ったところ手応えがあり、火を灯して落下したのを見ると、頭は猿、体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿という異形の妖怪の死体だった。これが鶴で、その時、鶴を射た矢を洗ったのが鶴池だという。トラツグミ



は森の中で夜中に細い声で鳴くために鶴鳥と呼ばれるが、この異形の妖怪もトラツグミに似た声で鳴くために鶴と名付けられたという。この時の矢尻は、頼政が鶴退治成就のお礼に奉納し神明神社（下京区）に残っている。

#### IV. 怨 霊

##### 1. 菅原道真

怨霊とは怨み、憎しみをもった人の生霊、非業の死を遂げた人の霊で、人に災いを与えるものと恐れられた。中でもよく知られるのが、平安前期の政治家、学者である菅原道真である。

藤原氏の専権を抑えて天皇中心の理想政治を実現しようとする宇多天皇の信任を受け、蔵人頭、参議、左大弁、中納言、民部卿、権大納言、春宮大夫、侍読と出世し、ついには醍醐天皇により、藤原時平左大臣任命と同時に右大臣に任じられた。しかし道真の栄達は多くのものに妬まれ、三善清行に辞職を求められた。他氏を次々排斥してきた藤原氏にとって道真は強力なライバルと見做され、901（延喜元）年従二位に叙してまもなく、時平の中傷によって大宰権帥に左遷、天皇の厚恩を慕い望郷の思いにかられつつ、失意のまま903（延喜3）年に死亡した。

死後、疫病が流行し、日照りが続き、醍醐天皇の皇子が相次いで病死した。さらには930（延長8）年、愛宕山上空から黒雲が垂れ込め都を覆いつくして雷雨となり、内裏の清涼殿を落雷が直撃した。大納言民部卿藤原清貫は、衣服に火がつき胸を焼かれ即死、右中弁内蔵頭平希世は顔を焼かれてまもなく死亡した。さらに紫宸殿にも落ち、右兵衛佐美努忠包が髪を、紀蔭連が腹を、安曇宗仁が膝を焼かれて死亡、警備の近衛2名も死亡した。醍醐天皇は常寧殿に避難したものの、惨状を目の当たりにして体調を崩し、3ヶ月後に死亡した。

藤原清貫は左遷された道真の監視を藤原時平に命じられていたこともあり、雷を操った道真の怨霊に殺されたという噂が広まった。道真の祟りを恐れた朝廷は、道真の罪を赦すと共に贈位を行った。

##### 2. 早良親王

平城京から長岡京への遷都を決めた桓武天皇は、造長岡宮使として藤原種継を任命。ところがこの種継が暗殺される事件が起こった。桓武天皇は反桓武勢力の大伴継人らを犯人とし、即刻処刑、実弟の早良皇太子も逮捕して、乙訓寺に幽閉した。早良皇太子は無実を主張して、絶食し、淡路島へ配流される途中に非業の死を遂げた。

翌月には桓武天皇の長子安殿親王が皇太子となったが、早良親王の憤死後、桓武天皇の母や妻たちが次々と死に、安殿親王も不可解な病にかかった。

##### 3. 伊予親王

桓武天皇の第三皇子で、806（大同元）年中務卿兼大宰帥に任ぜられたが、翌年、反逆の首謀者であるとして母藤原吉子とともに川原寺（奈良県明日香村）に幽閉され、絶食した後毒を飲んで自害した。異母兄平城天皇の側近であった藤原式家、藤原仲成に操られた藤原宗成に失脚させられたものとされているが、後に無実が判明し、一品が追贈された。

##### 4. 橘逸勢

空海、嵯峨天皇と共に三筆と称される平安時代の書家、官人で嵯峨天皇皇后橘嘉智子の従兄弟。842年、嵯峨上皇没後、恒貞親王を立てようと伴健岑と画策するが発覚、謀反を企てていると逮捕された。杖で打つ拷問の後、健岑は隠岐へ、逸勢は伊豆へ流罪となった。しかし逸勢は伊豆に送られる途中、遠江板築（浜松市）で病没した。死後、逸勢は罪を許され、従四位下を賜っている。

##### 5. 文屋宮田麻呂

平安時代初期の官人。843（承和10）年三位従五位上のとき謀反の罪により伊豆国へ配流となったが、無実であることがわかり、863（貞観5）年に神泉苑の御霊会で慰霊されている。

##### 6. 崇徳天皇

1156（保元元）年に勃発した保元の乱で敗北した崇徳天皇は、配流。血書をもって京への帰還を

願うが、聞き入れられず、「日本国の大魔王となり、天皇を民におとしめ、民を天皇としてやる」と言い残し、失意のままこの世を去った。

髪も爪も切らず、「生きながら鬼になった」と言われるくらいすさまじい姿で、白峯山に埋葬された時、突然雷鳴が鳴り響き、激しい風雨が襲い、棺からは血が流れた。その後、怪事件がたびたび起こり、崇徳天皇の怨霊の祟りとされた。

### カオスに戻る危険性

自然を排除して、自らの作り上げ、統制したコスモスとして確保したはずの都の都市空間には、外部からも、内部からも、鬼、妖怪、怨霊といった超自然的存在が侵入、発生し、コスモスを攪乱する。したがって、都の空間は、単に物理的に切り取っただけでは、すぐにカオスに戻ってしまう危険にさらされていたのである。

## 第3章 カオス、超自然に対抗する施設

### I. 立地と怨霊

#### 1. 怨霊への恐怖と遷都

京都市の南西に接する長岡京が都だったのは、桓武天皇による784（延暦3）年11月11日の平城京からの遷都後、794（延暦13）年10月22日の平安遷都まで僅か10年間、それも未完成のまま廃都となり、平安遷都時には、瓦、礎石、柱まで運ばれてしまったという。

それでも発掘の結果、ほぼ全域で工事は進められており、東西南北の大路小路もほぼ完成、民家約1万棟、人口5万人と推定されている。

平城京が廃都になったのは、仏教勢力からの絶縁、人心一新、増大した人口を支える水運の便がないことなどが原因とされているが、長岡京の場合は、洪水、政争もあったものの、真の理由は、桓武天皇が早良親王の祟りを恐れたためである。早良親王の憤死後次々と不幸が続き、陰陽師はこれを早良親王の怨霊の祟りと判じ、長岡京の放棄が決定されたのである。

桓武天皇は他にも種々の陰謀がささやかかれてい

る。桓武は、光仁天皇の第一皇子だが、母は渡来系氏族の出身で、家柄が低く、皇位継承者の立場になかった。ところが、父光仁天皇の皇后で聖武天皇の娘である井上内親王が、天皇を呪詛したとして他戸親王おきよと共に幽閉されて死ぬという不可解な事件が起こり、桓武はそのおかげで皇太子になった。天皇になった後も、聖武天皇の娘の中で最後に残った不破内親王とその子供の氷上川継を謀反の罪で流罪にしている。

こうした状況で平安遷都が決められたため、道路、橋梁、上下水道といった、人が実際に生活していくうえで必要不可欠なものを、どう合理的に配置するかを決める現代の都市計画とはまったく違った、現代人の目には合理的とはいえない側面、すなわち超自然への対応がきわめて重視された。

### 2. 四神相応の立地

長岡京と比して、遷都への天皇の係わり方ははるかに積極的かつ主体的、慎重で、793（延暦12）年正月には藤原小黒麻呂らに、山背国葛野郡宇太村の地相を調査させ、翌月には伊勢神宮、先帝の陵墓への遷都の奉告が行われた。また天皇自身が新京の地の巡覧を繰りかえし、最終的に遷御したのは翌794年10月22日である。翌日の詔で山背を山城に改め、平安京と命名した。

こうして建設が決定された平安京は、四神相応の地が選ばれている。四神とは、中国古代の想像上の動物で、それぞれ天空の四方に輝く星宿せいしゆくに配当され、地上では四方の土地を分担して守護する霊禽神獣であり、四神相応とは、地理的景観が天の四方の方角を司る四神の存在にふさわしいすぐれた地勢、地相のことで、四地相応ともいう。中国、朝鮮では、背後に山、前方に海、湖沼、河川の水がある背山臨水の地を、左右から砂と呼ばれる丘陵、背後の山よりも低い山で囲むことで蔵風聚水（風を蓄え水を集める）となっている場合が四神相応の地である。

平安京の場合、北の丹波高地を玄武、東の大文字山を青龍砂、西の嵐山を白虎砂、南にあった巨椋池を朱雀とする対応付けが可能で、背山臨水を左右から砂で守るという風水の観点から、正しく

四神相応の地であった。

また日本では、四神を「山川道澤」に対応させる解釈もあり、玄武は北方を守護するとされ、五行思想では北方を水と関係づけたため、玄武は水神ともみなされて、ヘビとカメが合体した姿とされた。竜脈と呼ばれる気の流れの発信地である丘陵が求められ、船岡山がそれに当たるとされる。船岡山は北区南部の標高 112 メートル、船を伏せたような山容の小さな丘で、平安時代都人の遊宴の地であり、また葬送の地でもあった。

白虎は西の守護神で、都にこもった邪気を逃がす道が求められ、都から西に向かう大道山陰道がそれに当たるとされる。

青竜は東の守護神、清い水流の象徴で、鴨川がそれに当たり、鴨川上流には古代豪族鴨氏が祀る上賀茂、下鴨神社もある。

朱雀は南方の守護をつかさどるが、巨椋池おぐらがそれにあたる。巨椋池は現伏見区、宇治市、久御山町にまたがる周囲 16 km、水深 1 m の沼で、豊臣秀吉の桃山城築造の際、堤防で宇治川と分離され、さらに 1933（昭和 8）年には干拓されて消滅、700 ヘクタールの水田となり、現在は住宅地化が進んでいる。

## II. 入口を護る

### 1. 東 寺

東寺、西寺（南区）は、大内裏からまっすぐ南に向かう平安京のメインストリート朱雀大路と南端の九条大路の交点に立つ羅城門を挟んで建てられている。796（延暦 15）年任命された藤原伊勢いせ人が東西両寺造寺長官で、悪鬼の侵入を封じ入口を護る平安京鎮護を目的として建立された官設寺院である。

東寺はその後桓武天皇の子嵯峨天皇から空海に下賜され、教王護国寺と名乗り、真言密教の中心的道場となった。

### 2. 西 寺

朱雀大路を挟んで東寺と相対し、右大寺うだいじとも呼ばれた。東寺の空海に対し、西寺には守敏僧都しゅびんが入り、発展、860（貞観 2）年には文徳天皇の国

忌が行われ、鎮護国家の寺として栄えた。990（正暦元）年の火災により焼失し、以後荒廃、現在は旧跡を残すだけである。

## 3. 六 地 蔵

現在も毎年 8 月 22 日～23 日、旧街道口の六体の地藏尊を回る「六地藏めぐり」という風習がある。「お幡はた」と呼ばれる札を受け、束ねて護符として家の入り口につるすのだが、この六地藏とは、奈良街道の入り口の伏見地藏（大善寺）、大阪街道の鳥羽地藏（浄禅寺）、山陰道の桂地藏（地藏寺）、周山街道の常盤地藏（源光寺）、鞍馬口街道の鞍馬口地藏（上善寺、明治に深泥池の地藏堂から移動）、東海道の山科地藏（徳林庵）である。

1665（寛文 5）年の大善寺「六地藏縁起」によると、小野 篁たかむらが他界し冥途に赴いた際、生身の地藏菩薩に逢い、その教えにしたがって蘇生した。その後、6 体の地藏菩薩像を刻んで、木幡の里（現在の伏見地藏の地）に安置。保元 2 年、平清盛は後白河天皇の勅命を受け、京洛の入口 6 カ所にそれぞれ六角円堂を建て 1 体ずつ分置、西光法師に命じて供養させたのが由来だという。

## III. 四方封じ

### 1. 岩 倉

岩倉とは岩蔵、石倉、石座などとも表記される磐座で、山や巨石など自然の威容そのものが神とされた信仰に由来する。平安京造営の際に桓武天皇は都の四方の山上に一切経を納め、東西南北の名を冠する四つの岩蔵が設けられた。

北岩倉の山住神社（左京区）は社殿がなく、神南備山かんなびさんと仰ぐ巨石を神の降臨する磐座と崇めた信仰の遺跡。南岩倉は朱雀年間開基の青蓮山明王院（下京区）、東岩倉は観勝寺（左京区）、西岩倉は金蔵寺こんぞう（西京区）である。

### 2. 大將軍神社

『都名所図会拾遺』に「おのおの鬼神を領して四方を鎮護す」とされ、『近畿遊覧記』にも、王城四方の鎮護に大將軍社を建てたとされているように、桓武天皇は、「大將軍」と呼ばれ古代神話

に荒ぶる神として登場する素戔鳴尊すさのおのみことを京都の四方に配して都の守護としたという。

ただ大將軍神社がどれであるかは、史料によりいろいろで、『山城名勝志』では「今在王城四方，北大徳寺門前，南藤森内，東岡崎西南，西京大將軍村」と記されているが，現在大將軍神社とされているのは，東方が東三条大將軍社（東山区），西方，大將軍八神社（上京区），南方，藤森神社境内大將軍社（伏見区），北方，今宮神社境内大將軍社，西賀茂大將軍神社（北区）である。

地図上では東西の大將軍神社と南北の大將軍神社を結ぶ線の交点は，大内裏の正門，朱雀門の位置にあたり，平安京の中樞・大内裏の入口が東西南北の大將軍神社によって，つまり素戔鳴尊によって守られているというわけである。

### 3. 首塚大明神

大江山で酒呑童子を退治した四天王は，証拠の首を都に持ち帰ろうとした。都・山城の国と，隣国丹波の国との国境である老ノ坂（西京区）で休憩していると，道端の子安の地蔵尊が鬼の首のような不浄なものを天子様のおられる都へ持って行くことは許されないと云ったが，力持で知られる坂田金時は，証拠の品として都へ持って行こうと首を持ち上げようとした。ところがどうしても持ち上がらず，止むを得ずその場所に首を埋めて塚を作ったのが，今も京都市と亀岡市の境界にある首塚大明神とされる。

この老ノ坂は西の辺界とみられ，疫病の侵入を防ぎ都城鎮護のための四角四境祭の祭儀場であり，現在でも，酒呑童子が首を切られるとき，今までの罪を悔い，これからは首から上に病をもつ人々を助けたいと言い残したというので，首から上の病気に霊験あらたか，とされている。

## IV. 方除け

### 1. 天狗の棲む北の守り

都の北，背後に広がる山岳地帯である鞍馬は，統制されたコスモスである都とは異なり，天狗など魑魅魍魎の出没する魔界であり，魔界を封じ，都への侵入をはかる悪鬼を見張るために，鞍馬寺

（左京区）がおかれた。

鞍馬寺は，天台宗の国家鎮護の寺であり，坂上田村麻呂の東北遠征の祈願所でもあったから，蝦夷鎮魂にも用いられた毘沙門天像が安置され，左手をかざして南を見るという奇妙なポーズをとっている。これは都を遠望し，悪鬼の侵入を監視している姿であると伝えられている。

### 2. 貴船神社

都の北側の山岳地帯には鴨川の上流にあたる賀茂川や高野川があり，川から悪鬼が都へ侵入するのを防ぐために，貴船神社（左京区）を川の守護神として守りを固めた。

貴船神社は，平安遷都以前から賀茂川源流に鎮座していたが，著しい霊威を秘めた有力神だったため遷都後の818（弘仁9）年大社に位置づけられ，朝廷から祈雨の使いが派遣され，水神，祈雨の神としての存在が公認された。

### 3. 城南宮

祭神は息長帯日売命やちほこのかみ，八千戈神くにとこたちのみこと，国常立尊で，祈雨の祈願が行われたが，都城のほぼ真南，鴨川に臨む要衝の地（伏見区）にあり，平安遷都時に王城守護のために創祀されたともいわれ，方除けの神として知られている。

### 4. 岡崎神社

桓武天皇が都の東の守りとして794（延暦13）年に建立したのが，東天王と称される岡崎神社である。旧社地は北白川であるが，869（貞観11）年播磨国から改めて牛頭天王（素盞鳴命）を勧請して現在地（左京区）に祭祀した。その後，牛頭天王は感神院（現八坂神社）に移し祀られている。1178（治承2）年に中宮のお産の奉幣を賜ったことにより，安産の神として信仰される。

### 5. 愛宕神社

乾（北西）の方向は前鬼門とでもいうべき，恐ろしい方向，荒神が動いて行く方向で，ふさいだり，汚したりすると，荒神が祟るといわれるが，桓武天皇は，この守りとして，遷都以前からあ

た愛宕山の愛宕神社（右京区）を整備したといわれる。

## 6. 剣神社

桓武天皇が巽（南東）を守るために、今熊野の地に宝剣を埋め、その上に作ったのが剣神社（東山区）とされる。

## V. 鬼門封じ

### 1. 鬼門

鬼門とは丑寅（北東）の方角で、特に陰陽道では鬼が集まり、出入りする方角として忌み嫌われている。今日でも鬼門の方角に出入り口、家の出張り、便所、浴室を設けるな、などと言い、守らないと病人、災難が絶えないなどという。鬼門除けに稲荷などを屋敷神として祀ることも広く行われている。

### 2. 御所

御所では北東角の猿が辻の築地塀が切り込まれて角を欠き、上に鬼を追い払う役目の猿の木像がおかれている。これも御所の鬼門で、鬼が集まり、とがった角が鬼を刺激するからとか、鬼の角をとるため、などと言われている。

### 3. 幸神社

御所の北東隅から北へ200 m（上京区）に所在。元々賀茂大橋南側の鴨川近くにあり、猿田彦神を祀っていたが、遷都の際、鬼門の守護神として造営された。御神体は拝むと縁に恵まれるが、触れると祟りがあるという「御石さん」と呼ばれる石で、本殿の東北には、烏帽子をつけ、御幣を担いだ左甚五郎作と伝わる猿の木像がある。

### 4. 吉田神社

859（貞観元）年、中納言藤原山蔭が春日の四神を勧請、平安京の鎮守神として都の鬼門に位置する吉田山（左京区）に創建した。

このあたりは、怪しげな妖気が漂い、貴人が通るとき、妖艶な美女が現れ男を足止めしたなどといわれ、都でもっとも危険な方角とされた。それ

ゆえ、平安時代から盛んに追儀式が行われ、現在も赤、黄、青の三匹の鬼が出没し、鉄棒を振りかざして参詣人の間を暴れまわる鬼やらい神事が行われている。

### 5. 赤山禪院（左京区）

比叡山延暦寺の塔頭で、都七福神の一つ福禄寿神でも知られる。慈覚大師円仁の遺命により888（仁和4）年、天台座主安慧が創建、本尊は陰陽道の祖・泰山府君（赤山明神）。表鬼門を守護する寺として、王城鎮守、方除けの神として信仰が篤い。

拜殿屋根には、比叡山延暦寺の地主神である日吉神社の使いで、御幣と鈴を持った瓦彫の神猿が安置され、御所の猿ヶ辻の猿と呼応して鳴き交わし、御所の鬼門を守っている。

### 6. 狸谷山不動院（左京区）

本尊不動明王は都の鬼門守護として、桓武天皇勅願により祭祀されたもので、以来、<sup>たぬき</sup>咤怒鬼不動明王として、悪鬼退散の靈験が著しいとされた。鎌倉時代には洞窟に安置され、公家殿上人をはじめ、都人の尊崇を受けた。

無数の狸の置物が置かれているが、咤怒鬼不動明王が民間信仰で動物の狸に代わったためである。

### 7. 上賀茂神社、下鴨神社

平安遷都後、都の鬼門の方向から流れてくる鴨川を通じて都に侵入する悪鬼を封じるために、古くからの地霊だった賀茂別雷<sup>かもわびいかづち</sup>神社（上賀茂神社）（北区）、賀茂御祖<sup>みおや</sup>神社（下鴨神社）（左京区）を造営し直し、皇城鎮護の神、総地主の神、そして鬼門の守り神として崇められてきた。両社あわせて賀茂神社と総称される。

### 8. 四明岳

比叡山は、京都市左京区と天津市の府県境に位置する大比叡（848.3 m）と、左京区の四明岳（838 m）の二峰から成る双耳峰の総称である。このうち四明岳の四明とは、中国道教の四明君、つまり四方の悪鬼を封じる神のことである。平将

門が頂上の将門岩から都を見下ろして天下制覇の野望を起こしたと伝えられる。

### 9. 比叡山延暦寺

延暦寺（大津市）は比叡山全山が境内とって、もよほほどの広大な寺院である。『叡岳要記』によると、桓武天皇は都の鬼門に位置する比叡山に唐から帰国した留学僧、最澄（伝教大師）を送り、788（延暦7）年一乗止観院（比叡山寺）、後の延暦寺を建立させ、都で災事が起こるたびに、比叡山で悪鬼調伏の祈祷が行なわれた。

鬼門封じの社寺の中でも別格で、朝廷、権力者との関係も深く、最澄死後の823（弘仁14）年、嵯峨天皇から年号由来の延暦寺の名が与えられたし、座主は皇族、摂関家から選ばれるほどだった。天台座主慈円も、『拾玉集』で「我山は花の都の丑寅の鬼のいる門をふたぐとぞきく」と詠んでいる。

### 10. 元三大師墓

最澄の200年後、第18代座主良源の代に、延暦寺は老朽化していた諸堂を復興し、最も栄えた。この良源、元三大師は別名降魔大師とも呼ばれるが、この元三大師の遺体が埋葬された墓も比叡山の鬼門に位置している。

### 11. 日吉大社

比叡山の東麓には、延暦寺を鎮護する山の神山王権現を祀る日吉大社（大津市）があり、仏教の力だけではなく、神道の力も借りて都の鬼門を封じていることになる。

### 12. 壬生寺

末申（南西）は裏鬼門、病門といい、鬼門同様に忌み警戒される。壬生狂言で知られる壬生寺（中京区）の狂言は、1300（正安2）年の御霊の法会に始まるといわれ、現在も鬼払い狂言が演じられている。八幡市の石清水八幡宮も裏鬼門の守りとされる。

## VI. 怨霊慰撫

### 1. 北野天満宮

平安時代には天変地異や疫病流行は怨霊の祟りであるとする御霊信仰が盛んであったが、中でも恐れられたのが菅原道真の怨霊で、そこから天神信仰が生じた。北野天満宮（上京区）は942（天慶5）年に道真の託宣を受けた巫女多治比奇子（文字）が小祠を構えて神霊を奉祀したのに始まる。

993（正暦4）年には道真に左大臣正一位、さらに太政大臣が追贈され、1004（寛弘元）年の一条天皇以後歴代天皇も行幸、菅公の霊は「文道の祖、風月の本主」と崇められ、現在も学問の神として受験生の祈願で知られている。

### 2. 崇道神社

藤原種継暗殺事件の首謀者として逮捕、乙訓寺（長岡京市）に幽閉された桓武天皇の実弟早良親王は、淡路に流される途中無実を主張して絶食死。その後天皇の近親者の死が続き、都に悪疫が流行したため、早良親王の祟りとされ、その怨霊を鎮めるために、崇道神社（左京区）が設けられた。800（延暦19）年には崇道天皇と追号を贈り、墓を現在の八島陵に改葬。他に藤森神社、上御霊神社にも祀られている。

### 3. 今宮神社

怨霊の仕業とされた疫病を鎮めるために、紫野に作られたのが今宮神社（北区）である。赤毛、黒毛の鬼を従えた行列が鐘や太鼓を打ち鳴らす「やすらい祭」は京都三大奇祭の一つとして知られるが、春、花が盛んに飛散する時期に疫病も流行するため、風神を鎮めようとする祭りで、10世紀に早良親王の怨霊が疫病をもたらさないように鎮めるために行われた御霊会から始まったといわれる。

### 4. 下御霊神社

桓武天皇の皇子である伊予親王とその母藤原吉子の霊を鎮めるために、839（承和6）年に創建、

2度移転したが1590（天正18）年豊臣秀吉の寺社整理により中京区の現在地に移っている。崇道天皇、吉備真備、藤原広嗣、橘逸勢、文屋宮田麿、火雷天神ひらいも加えた八所御霊を祀り、京都御所の産土神として崇敬されてきた。

### 5. 上御霊神社

京都御所の真北にある御霊神社（上京区）の通称。元は上出雲寺があったが、遷都の際、桓武天皇の勅願により王城守護の神として、崇道天皇を祭ったのが始まりで、その後吉備真備、橘逸勢らを加え十三柱を祀る。

863（貞観5）年悪疫退散の御霊会が勅命で催されるなど、怨霊をなだめ祀るための御霊会がたびたび行われ、疫病除の霊社、御所、都、国家の守護神として朝野に尊信されてきた。江戸時代まで、天皇家では皇子が生まれると、怨霊の祟りを恐れてこの神社に参詣する慣わしで、厄除け、厄病などの祟りに効く上御霊名物唐板せんべいを購入していた。明治天皇も祭神五柱を加えている。

### 6. 下桂御霊神社（西京区）

祭神は橘逸勢。唐に留学した秀才、能書家として知られるが、帰国後九州の伴之氏謀反（承和の変）に加わっていたとして伊豆に追放、途中の三ヶ日の郷で死亡。怨霊のたたりが数多く起き、850（嘉祥3）年に祀った。

### 7. 玄武神社（北区）

不遇な生涯を過ごしたこれたか惟喬親王（文徳天皇第一皇子）を祭神とし、親王の霊を慰め、疫霊を退散させる「玄武やすらい祭」が行われる。

### 8. 白峯神宮（上京区）

保元の乱に敗れ出家して讃岐に流され、大乘経を鬼神にささげ都を呪いながら死んだ崇徳上皇は、天皇が表舞台に立った時にその怨霊が登場するというので、明治天皇が創建した。

## VII. 都の警報装置

### 1. 将軍塚

将軍塚（山科区）は東山三十六峰のひとつ華頂山上の塚で、毘沙門天の化身とも言われる坂上田村麻呂の墳墓とも言われる。桓武天皇はここに、都が長久であるように、土で8尺（約2.4m）の人形を作り、鉄の鎧、兜を着せ、鉄の弓矢を持たせて、東山の峯に都を見下ろすように西向きに立てて埋めた。天皇は、末代に都を他国に移すようなことがあったら守護神となるようにと人形と約束した。それゆえ天下に異変が起ころうとする時には、必ず鳴動するといわれる。

元々将軍塚古墳群のひとつで、伝説がかぶさったとされるが、この伝説は18世紀まで生き続け、慶長年間にも鳴動したという。

またこの坂上田村麻呂自身が、名水の霊力を知り、建立したのが清水寺で、804年には桓武天皇の御願寺となり、都を護る霊験あらたかな寺として信仰されていた。

### 2. 大 祓

人の犯した罪による穢れが神の怒りに触れ、罰として天変地異、旱魃、飢饉、疫病などが起こると考えられたから、穢れを排除する儀式、大祓が行われた。

『延喜式』（巻第一・神祇一）には、「六月晦日の大祓（十二月は此に准ぜよ）。— 晦日の申時以前に親王以下百官、朱雀門に曾集して卜部祝詞を讀め」と規定されており、毎年6月、12月、そして臨時に、大内裏南面中央、朱雀大路の起点である朱雀門で、穢れの排除が行われた。

### 排除されたもののパワー

常にカオスへと還ってしまう危険性を持つ平安京は、その立地自体が、単に交通、水利、気候といった、現代都市計画において重視されるような合理的理由だけで選定されたわけではなく、山、川、池といった自然地形を読み取って選定し、それに宗教的意味を付与したコスモスとして確保された空間である。さらには現代都市のように、合

理的に自然と対決し、自然を排除しただけで、成立、存在し続けることができたわけではなく、超自然に対抗する様々な仕掛けが用意されているのである。

ただし、その超自然に対抗するもののパワーの源泉が、都の空間から排除されたはずの水、猿や龍といった動物、死者、鬼というわけである。

## 第4章 カオス、超自然と対決する 神と人のパワー

### I. 神と祭

#### 1. 素戔嗚尊と八坂神社祇園祭

八坂神社（東山区）は、神仏分離令以前は祇園社と呼ばれたが、社伝では創祀は656（齊明天皇2）年で、高句麗から来朝した伊利之使主が新羅国の牛頭山に鎮座する素戔嗚尊を勧請し、愛宕郡八坂郷に奉斎したのが始まりであるとする。

主祭神の素戔嗚尊は、地名須佐と関連をもつとともに、「すさ」の根源は新羅の巫覡王・次次雄に淵源を持つともいわれる。父から定められた支配地を治めず、災いを起こして父に追放され、さまざまな乱行を重ねたため、姉天照大神は天岩戸に隠れ、全世界が暗黒となってしまった。この罪により神々に追放され、根国に赴く途中の出雲国で八岐大蛇を退治し、根国の支配者となった。

祇園祭は、京都三大祭、日本の三大祭ともいわれる有名な祭りである。869（貞観11）年疫病が流行し、天変地異が起り、五穀が実らなかった。これは素戔嗚尊の祟りが原因とされ、勅命によって6月7日全国の国の数である66本の鉾を立て、14日洛中の男児が神輿を奉じて神泉苑に集まり、御霊会を修して除疫を祈ったのが始まりとされる。

この粗暴な外来の悪神は疫病の原因となる祟りをなしたが、他方で疫病退散の神ともされた。これは都に侵入する悪鬼を食い止めるためには、それに匹敵する荒ぶる神でなくては対抗できないと考えたというわけである。

#### 2. 牛頭天王

素戔嗚尊の化身とされたのが牛頭天王で、天竺

北方の九相国の吉祥園の城の王で武塔天神とも呼ばれ、祇園精舎の守護神である。

『備後国風土記』には、旅の途中の武塔神は、貧しいにもかかわらず宿を提供してもてなした蘇民将来の子孫に対して、後に伝染病が流行した際に、茅の輪をつけて免れさせ、豊かにもかかわらず断った弟の巨旦将来など他の者はことごとく死に絶えたという説話があるが、その武塔神は「われはハヤスサノヲの神なり」と自称したとされ、牛頭天王＝武塔神は、天上を追放された最大の祟り神素戔嗚尊と習合されていた。

牛頭天王は、新疆の牛頭山で熱病に効果のある梅檀が取れるため、この山と同名の牛頭天王が疫病に効く神として崇められたのだともいう。

#### 3. 祇園囃子の力

祇園祭は流行病、伝染病が蔓延する夏に行われる。病因に関する科学的知識のない時代においては、伝染病蔓延の原因は都市空間への疫病神の侵入などと考えられた。医学、疫学的対抗手段は無いから、宗教的、呪術的対抗手段として始まったのが祇園祭である。

中川真によれば、祇園囃子のコンチキチンと表現される金属音の力も疫病神排除に利用されているという。つまり日本では、古くから物を動かすときに囃子を用いたが、それは人の力では限りがある場合に、囃子が超自然力を引き出すと考えられたからである。さらに祇園囃子は、長時間聞いていると聴力に異常をきたすほどの大きさの金属音で、しかも割れ鉦の音なのである。割れ鉦の異常に大きな音という、音楽とは無縁な、文化の統制を受けないノイズ、いわば自然の音ゆえに、特別な力を持つものと考えられ利用されてきた、というのである（中川、2001）。

#### 4. 都七福神

7つの福德の神を巡る七福神巡拝は京都が発祥の地とされ、有名無名の七福神が多くあるが、有名なのは都七福神、京の七福神、京都七福神である。現在も七福神の神々の力をもらって福運を授かるうとし、特に新春の七福神巡拝は七難即滅、



七福即生極まりなく、功德が大きいとされる。

この七福神は、雑多な福德の神を七の聖数にあてて組み合わせたもので、1420（応永 27）年に七福神の風流行列が京都で行われたり、文明年間（1469～87）には七福神を装った盗賊が出没し、これを福神の来訪としてむしろ歓待したという記録などが残っている。

神々は外来の神が多く、大黒天はインドの神摩訶迦羅マカハラで自在天の化身（眷属）ともいう。弁才天もインドの天部の神で音曲、知恵、福財をつかさどる。

毘沙門天は四天王の一つで北方守護の神だが、インドのベータ時代からの神。もとは暗黒界の悪霊の主であったが、ヒンドゥー教では財宝、福德をつかさどる神となる。シルクロードの要衝であったキジルが吐蕃によって攻められた時、密教僧であった不空が祈禱をすると、城の北門に毘沙門天が出現して吐蕃を撃退したという故事に基づいた像とされ、日本に伝来すると、外敵追放のため平安京羅城門の上に安置された。

布袋の禅僧契此、福祿寿、寿老人はいずれも中国の福德神で、禅宗渡来後水墨画の好画題として移入されたものとされる。

恵比須神の場合は海の幸をもたらす寄神よりがみで海辺の民間信仰に根ざすものとされる。すなわち漁村ではエビス神は、海から来る神霊、漁の幸をもたらすものとされ、海から寄った一種の石を神体として祀る。嵐の後にうち上った見なれぬ石、網にかかった石などを祀って大漁を得たという伝承や、徳利のような漂流物、流れ仏（水死人）をエビスとって祀る、大漁のさいに来合わせた外来者をエビスとして歓待するといった風もあった。またエビスの語源自体が辺境の人、異民族、外人の意とされている。

いずれにしろ日本、中国、インドの神々が異境からやってきて人々に福をもたらすというわけである。

## 5. 鞍馬寺 魔王尊

鞍馬寺は、鑑真和上の弟子鑑禎上人が770（宝亀元）年に霊夢で白馬に導かれて鞍馬山に至り、

毘沙門天像を祀る草庵を結んだのが草創という。

796（延暦 15）年には、観世音菩薩を祀る霊地を求めていた造東寺長官の藤原伊勢人が貴船明神の導きで鞍馬山に至り、毘沙門天と観世音菩薩をあわせ祀ったという。奇岩の上に建つ奥の院魔王殿には魔王尊像サナトキクマラが祀られており、毘沙門天、観世音菩薩、魔王尊が三身一体の本尊、尊天と呼ばれている。

毘沙門天・観世音・魔王尊はそれぞれ太陽・月・地球および光・愛・力を象徴し、鞍馬山は護法魔王尊がすばらしい波動を発し続ける霊山、大地の力、護法魔王尊の力に満ちた霊山とされる。

この秘仏魔王尊は、650 万年前に人類救済の使命を帯びて金星から地球に降り立ったといわれ、体は人間とは異なる元素から成り、年齢は 16 歳のまま、年をとることのない永遠の存在であるという。

## II. カオスに対抗する境界人

### 1. 安倍晴明

天皇も貴族も、常に怨霊を恐れた。それは栄華を極める者の陰には不遇をかこつ者もいたわけで、恨みのうちに世を去った者が怨霊と化すと考えた。そこで安泰と延命を願い、占いによる吉凶を求め、儀式を行ったのが陰陽師である。

陰陽寮は内裏のすぐ南にあり、天皇に直結する中務省に設置された役所で、吉凶を占い、邪を払う陰陽師が朝廷から重視されていた。

この陰陽師の中でももっともよく知られるのが安倍晴明である。都の北端の一条通の御所の鬼門には一条戻橋があるが、そのあたりは安倍晴明の屋敷があったとされ、現在晴明神社（上京区）が祀られている。

晴明は子供のころから鬼を見ることができ、後には式神を自由に使い、草の葉一枚で蛙をつぶし、呪詛の犯人を突き止めて呪いを跳ね返したなどといわれる。40 歳を過ぎて天文得業生となり、47 歳で陰陽師、52 歳で天文博士、57 歳で陰陽寮の第一人者となった。花山天皇、一条天皇に信任を受け、藤原道長に重用され、85 歳まで生きた。

晴明はまた妖狐の子ともされている。信太妻伝

説によれば、村上天皇の御代、摂津国安倍野（大阪市阿倍野区）の安倍保名が信太の森を訪れた際、狩人に追われていた白狐を助けてやるが、その際にけがをしてしまう。そこに現れた葛の葉という女性が、保名を介抱し家まで送り届ける。二人は恋仲となり結婚、童子丸という子どもが生まれた。童子丸が5歳のとき、葛の葉の正体が保名に助けられた白狐であることが知れてしまい、葛の葉は一首残して信太の森へと帰ってゆく。保名は書き置で葛の葉が恩返しに来たことを知り、童子丸とともに信太の森に行き、葛の葉から水晶の玉と黄金の箱を受け取る。この童子丸こそが後の安倍晴明であり、天文道を修め、母親の遺宝の力で天皇の病気を治し、陰陽頭に任ぜられたというのである。

## 2. 源頼光と四天王

四天王はインド神話時代から護世神とされ、仏教では須弥山の中腹にある四王天の主であるが、大江山酒吞童子征伐など都に出没する鬼に対抗した源頼光の郎党を源頼光四天王と称した。

この四天王は土蜘蛛退治にも活躍した。頼光が悪病にとりつかれた際、枕元に法師が現れ、縄で頼光を縛ろうとしたため、頼光は名刀で法師に斬りつけた。消えた法師を探索した四天王が、北野天満宮の北側の塚を掘り返したところ、土の中から人の背丈もある黒い蜘蛛がうごめいているのを発見、この土蜘蛛を退治し、鴨川に晒したところ、頼光も快方に向かったという。

## 3. 金太郎

桃太郎とともに子どもの姿の英雄として親しまれてきた金太郎は、四天王の一人、坂田金時の幼名とされる。

都から見たら異界としかいいようのない相模の国の、平地からみれば異界である足柄山の山奥で生まれた。『前太平記』によれば、母は山姥で、足柄山の山頂で赤龍と交わった夢をみて身ごもったとされ、人と龍の混血というわけである。

また熊と相撲を取り、ネズミ、鹿、兎、猪、狸などありとあらゆる動物達と仲良しで、農作業を

すれば、稗、粟、ごぼうなどが大豊作となったといい、動物や植物と交流できる非人間的神秘力を持つ。皆に怖がられて相手にしてもらえなかったが、都に出たところ源頼光に見いだされ、坂田金時と改名、四天王の一人として活躍することとなったのである。

## 4. 一寸法師、桃太郎

難波の夫婦が住吉大社に祈願して授かった男の子は、身長1寸だったため、一寸法師と呼ばれた。12、13歳のころ、針を刀に、お椀を船にして箸の櫂で川を上って都にやってきて、三条の宰相殿に仕える。16歳のとき、13歳の殿の姫を見そめ、姫が寝ている時に口に米粒をつけ、米が盗まれたと騒ぎ立てる。宰相殿は法師の計略にだまされて、法師に姫を殺せと命じる。姫を連れて鬼が島に着いた法師は、鬼に食われてしまうが、目から出て飛び回るので、鬼は打出の小槌を捨てて逃げてしまう。この小槌を打つと、法師は一人前の若者になり、金銀も打ち出して、都に上り、姫と結婚して出世する、という昔話である。

これに類する話は種々存在するが、鬼を退治した上に、呪力によって大きくなり、出世する、というスーパーパワーを発揮する一寸法師は、神への祈願の結果として生まれ、異常に小さく、虫か何かに近い人間離れしたものとして描かれているのである。

都の外だが、同様に鬼退治に活躍したのが桃太郎である。爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行き、婆が川から流れてきた桃の実を拾ったところ、桃から男の子が生まれた、という五大童話の一つとして知られる通り、金太郎同様に山奥で、山姥ならぬ桃という植物から生まれている。一人前になると、鬼が島へ黍団子を持って鬼征伐に行き、犬、猿、雉子といった動物達を家来として鬼を降参させ、宝物をもらって帰るのである。

## 5. 藤原俊仁

御伽草子の一である「鈴鹿草子」には、坂上田村麻呂をモデルとした藤原俊仁一族三代の妖怪退治談が語られている。近江国の大蛇と陸奥高山の

悪路王を退治した俊仁（日竜丸）は藤原俊祐の子で、父が益田ヶ池の大蛇の化身である美女と契り、生まれたとされる。俊宗（田村丸）も奈良坂山の霊山坊、鈴鹿山の鬼神大嶽丸、近江国の悪事高丸を退治しているが、俊仁が悪路王退治の途中で郡田村の賤女と契り生まれた子である。

### Ⅲ. 排除された者たちのパワー

#### 1. アテルイ

アテルイは、「続日本紀」に「賊帥夷の阿弓流為」とあるように、蝦夷の軍事指導者で、蝦夷平定を目指す朝廷に対し、蝦夷軍を率いてゲリラ戦術で長期に渡り抵抗、789年には胆沢（奥州市）に侵攻した朝廷軍を撃退し、朝廷から「鬼」と恐れられた。

結局兵力にまさる朝廷軍との長い戦いで蝦夷の国は荒れ果て、戦い疲れた民の命と引き換えに、アテルイとモレが、征夷大將軍・坂上田村麻呂に投降、802（延暦21）年、河内の植山で処刑されたといわれ、河州一の宮片埜神社（大阪府交野市）の宮山に、首塚が残され、その霊魂が鎮まっていると言われる。

片埜神社は、延喜式内社で、垂仁天皇の世に野見宿禰が土師氏の鎮守として創建。祭神は牛頭天王と菅原道真だが、豊臣秀吉が大坂築城の際に、城の鬼門鎮護の社として修築、正殿を大坂城天守の北東の石に刻んだ鬼面と相対させたため、鬼門方除け、家相方位の守護の神となり崇敬されてきた。お守りも絵馬も朱印も鬼の図柄で、節分豆まきでも「鬼は内」である。

#### 2. 八瀬童子

八瀬（左京区）は延暦寺の雑役に従事した童子村で、皇室との関係が深く、室町時代から天皇の行幸の際の賀興<sup>かよちよう</sup>丁として奉仕する男子は八瀬童子と呼ばれた。

明治天皇、大正天皇の葬送でも八瀬童子が天皇の棺を載せた輿である葱華輦<sup>そうかれん</sup>の輿丁を勤め、昭和天皇の場合も式場内の葬列に付従している。

八瀬童子は延暦寺の雑役に従事したとされ、伝教大師最澄が使役した鬼の子孫、閻魔王宮から輿

を担いできた鬼の子孫といわれる。

#### 3. 鞍馬天狗

鞍馬山の奥の僧正が谷には天狗が棲むとされ、とくに大天狗、鞍馬山僧正坊は牛若丸に剣術を教えたという。能「鞍馬天狗」では、牛若丸の境遇に同情した大天狗が、各地の天狗を引き連れ、黄石公と張良の逸話を語り聞かせた後、兵法の奥義を牛若丸に相伝、戦での守護を約束する、というストーリーである。

#### 怨霊、鬼も都を守護

都の空間は、自然の空間から切り取られ、動植物といった自然、まつろわぬ者どもを外に排除したコスモスとして確保された。

ところが、こうした都に侵入、発生し、コスモスを攪乱する超自然的存在に対抗するものは、山奥や海、インド、中国、朝鮮といった異郷、異国の神、さらには金星の魔王といった、都の空間から切り離された外の空間からやってきた。

また神も牛形だったり、スーパーマンが狐、龍、大蛇といった動物と人との混血だったり、桃から生まれたり、人間離れした異形であったりと、超自然に対抗するパワーもまた、排除したはずの自然が源泉となっている。

さらには、恐れられ、封じ込められたはずの怨霊、鬼が、逆に都というコスモスを守護する神へと転じられてもいるのである。

## 結 論

### I. 人はコスモスを求める

人は茫漠と広がる、自然の支配する空間の中で生きることにはできない。だから人は、空間を切り取り、内と外、中心と周縁といった境界を設定する。そして地形から動植物、水に至るまで、自然を外に排除し、内では統制しようとする。そしてそれらを完全に統制した、自らの価値観が投影された空間を確保できれば、それは自らが生きていくうえで好ましい、究極のコスモスとなるはずである。

しかしながら人は、一人で生きることはできず、他の人々と都市という空間を共有し、ともに生活していかなければならないが、そうした他者もまたコスモスの攪乱要因となり、生きていくことを阻害するわけで、人は他者を外へと排除し、内では統制しようとする。平安京の場合なら、絶対権力者としての天皇にまつろわぬ異文化の少数民族などを、鬼、妖怪、賤民などとして、鞍馬、貴船、陸奥など、方形に画し切り取った都の外の異界とされた空間に排除し、カオスを担わせたのである。

## II. カオスがコスモスを護る

ところがそうして確保されたコスモスたる都の空間にも、外の異界から、排除したはずのカオスが絶え間なく侵入してくる。整然と統制したはずの都の空間の内でも、人という動物は争い、怒り、妬み、憎しみ、怨むから、怨霊が生まれ、人々自身に襲いかかり、都をカオスへと戻してしまう。

そうしたカオスへの対抗手段として、為政者は四神相応の地を選び、社寺などを設け、神仏、陰陽師から金太郎まで、超能力のスーパーマンのパワーに頼るのだが、こうしたパワーの源が、実はしばしば、都の空間から排除したはずの動植物、水、動物と人の境界線上の異形、岩、そして死といった自然であった。つまりそうしたパワーを、排除先であるはずの山奥、唐天竺、金星等の他界、異界という外から、境界を越えて内へ導入するという結果になる。

さらには、怨霊や鬼も、神として崇め奉り、供養と祭祀を行うことで、天神様、鬼神などとして、都というコスモスを護る強力な守護神、御霊へと転化するし、近世には、豊国大明神のように、死者そのものが崇り性を払拭した神霊となる（山折、1995）。カオスがコスモスを護るというパラドックスである。

## III. コスモスとカオスというパラドックス

都の内と外の境界とされた川や道、門の外は、自然の空間であるだけでなく、死者の向かう他界であり、妖怪たちが棲息する恐るべき異界、カオスの空間だった。だから様々な防御策で、都とい

うコスモスを護ろうとした。しかしそうした外のカオスの空間は、単にコスモスを脅かす存在というわけではなかった。

平安京というコスモスを作り出すためには、死者、鬼の類を排除する空間が必要で、そうした外の、カオスの空間を作ることによってこそ、内なるコスモスを作り出すことができる。さらに内なる空間、コスモスを実感するためにも、対比空間として、外、異界、他界が必要である。妖怪は人を、外は内を、写す鏡であり、妖怪を、外を、見ることによってこそ、人を、内を、見ることができる。空間が、均質、平板でない場合にも、人の心は想像力によって活性化され得るわけで、外なるカオスの空間は、まさに内なるコスモスに不可欠、というパラドキシカルな関係にあるのである。

## IV. カオスの消えた世界

中世とは、鬼を作り出し、排除し、外なる異界、カオスの空間を作り出すという時代だった。それに対して現代は、非合理的、非科学的なものを排除する価値観が席卷する。

鬼、妖怪は非科学的と消去され、マタギ、サンカ、木地師など、山中の異界に棲み、鬼、妖怪の役割を担わされた漂泊者も、国家の中に組み込まれ、姿を消した。蝦夷の棲む鬼門だった東北地方も新幹線が駆け、都市にとっての異界だった農村も都市化が進み、異界としての役割を担えなくなった。いわばあらゆる空間がコスモス化してしまったわけで、まさに鬼も異界も見えない、カオスの見えない均質、平板な空間と化している、というわけである。

## V. 人、都市というパラドックス

これはまさに、人の心が創造力豊かに活性化されない、つまり、かえってコスモスを認識できない、生きる実感を持ち得ないという状況を生み出してしまっていることになる。

しかしここでもまた、現代都市では、ファンタジー、伝奇ロマンの類が隆盛で、次々と新たな都市伝説が生み出されるといった超自然回帰が見ら

れる。

さらに日本人は、日本の外にある途上国を、貧しく、汚く、不衛生で、気味の悪いゲテモノを食べ、政治も経済もでたらめで、犯罪にまみれ、何が起ころかわからない不気味な空間、ととらえる傾向もある。これは途上国を、農村や山に代わる新たなカオス、構造的対比の新たな対象としてしまっているのである。

いずれにしろ異界、カオスは、合理、功利、科学的価値観に覆われた都市というコスモスの背裏に密かに寄り添い、いくら振り払っても、浸み出してくる。そして実は、そうした異界、カオスの存在を必要とするのは、常に異界、カオスを排除しようとする人であり、都市なのである。

人、都市と、異界、カオスの表裏一体の関係を示す平安京の姿は、都市というもの、人というものが、常に相矛盾した二つの側面を持ち、それらの弁証法的過程としてしか把握できないもの、ということを示しているわけで、まさにパラドックスとしての人という存在の真の姿を見せてくれる鏡ともいえるだろう。

#### 参考文献

- 芥川龍之介, 2007, 『羅生門／鼻／芋粥』, 角川書店  
 土居浩, 1995, 「初検証 罪人引き廻しルートを歩いてみる」, 『京都魔界めぐり』, 宝島社  
 平川南, 1987, 「辺境と軍事」, 『平安京——都市の成立』, 朝日新聞社  
 石田志朗, 1987, 「鴨川の流路をめぐって」, 『平安京——都市の成立』, 朝日新聞社  
 ケンペル, 2005, 『ケンペル江戸参府紀行』, 雄松堂出版  
 勝田至, 2004, 『死者たちの中世』, 吉川弘文館  
 小松和彦, 1994, 『憑霊信仰論——妖怪研究への試み』, 講談社  
 蔵田敏明, 2000, 『京都・異界をたずねて』, 淡交社  
 栗本慎一郎, 1983, 『都市は、発狂する——そして、ヒトはどこに行くのか』, 光文社  
 京都文化博物館編, 1996, 『京都の歴史と文化』, 京都歴史博物館  
 京都市参事会, 1895, 『平安通志』, 京都市参事会  
 馬淵和夫, 国東文麿, 2008, 『今昔物語集 日本の古

典をよむ』小学館

- 丸山隆司, 2004, 『古代日本文学と文字』, おうふう  
 宮元健次, 2001, 『江戸の陰陽師 天海のランドスケープデザイン』, 人文書院  
 村井靖彦, 1987, 「古代国家の到達点としての平安京」, 『平安京——都市の成立』, 朝日新聞社  
 村井靖彦, 1987, 「遷都と造都」, 『平安京——都市の成立』, 朝日新聞社  
 村井靖彦, 1987, 「都城の文華」, 『平安京——都市の成立』, 朝日新聞社  
 村上健司, 水木しげる, 2005, 『日本妖怪大事典』, 角川書店  
 永積安明, 2009, 『平家物語を読む——古典文学の世界』, 岩波書店  
 中川真, 2004, 『平安京音の宇宙——サウンドスケープへの旅』, 平凡社  
 歴史探訪研究会, 2007, 『歴史地図本 知って訪ねる京都』, 大和書房  
 嵯峨井健, 1995, 「貴船神の正体はほんとうに呪詛神なのか?」, 『京都魔界めぐり』, 宝島社  
 桜井進, 2000, 『江戸のノイズ——監獄都市の光と闇』, 日本放送出版協会  
 笹本正治, 1990, 『中世の音・近世の音』, 名著出版  
 笹本正治, 2000, 『鳴動する中世 怪音と地鳴りの日本史』, 朝日新聞社  
 高橋康夫, 1987, 「永遠の都・平安京」, 『平安京——都市の成立』, 朝日新聞社  
 梅原猛, 1998, 『京都発見1』, 新潮社  
 渡辺豊和, 1995, 「太閤の野望, 巨大土塁を築いた秀吉の真の狙いとは?」, 『京都魔界めぐり』, 宝島社  
 山田邦和, 2009, 「京都の都市空間と墓地」, 『京都都市史の研究』, 吉川弘文館  
 山折哲雄, 1995, 「怨霊封じ込め 叡山の反逆者伝説」, 『京都魔界めぐり』, 宝島社
- ホームページ**  
 平安神宮ホームページ  
<http://www.heianjingu.or.jp/>  
 北野天満宮ホームページ  
<http://www.kitanotenmangu.or.jp/>  
 鞍馬寺ホームページ  
<http://kuramadera.com/index.html>  
 下鴨神社ホームページ  
<http://www.shimogamo-jinja.or.jp/>  
 神泉苑ホームページ  
<http://www.shinsen.org/>  
 八坂神社ホームページ  
<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/yasaka/>